〈弱さ〉と作家像――太宰治と芥川龍之介

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

◆太宰治と〈弱さ〉

> ***僕は、僕という草は、この世の空気と陽の中に、生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ欠けているんです。足りないんです。いままで、生きて来たのも、これでも、精一ぱいだったのです。***
>
> **―太宰治「斜陽」（1947 年）**

> ***人間、失格。***
> ***もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。***
>
> **―太宰治「人間失格」（1948 年）**

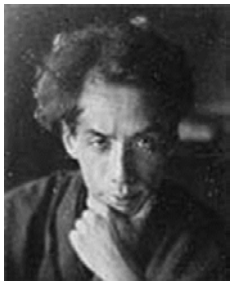
なかでも太宰治（1909－1948）は人生のなかで数回にわたる自殺未遂を繰り返し、その小説においても登場人物が自らの〈弱さ〉を吐露する箇所が数多く見受けられる。特に晩年に発表された代表作「斜陽」や「人間失格」においても、登場人物がその〈弱さ〉を表現している。

自らの〈弱さ〉について問いかけることは、多くの人間が経験することだろう。太宰治の作品が現在まで多くの読者に大きな共感をもって読み継がれている理由の一つが、こうした〈弱さ〉の表現にあることは間違いがない。

◆〈脆弱な知性〉としての作家像

そして〈弱さ〉と文学者を決定的に結びつけたのが、芥川龍之介（1892－1927）の自殺ではなかっただろうか。昭和のはじめ、プロレタリア文学や大衆文学の台頭のなかにあって、「ぼんやりした不安」という言葉で死を選んだ芥川の自殺は純文学作家の象徴として捉えられるが、特にプロレタリア文学側からは現実の前に敗北した〈脆弱な知性〉としても批判されることにもなる。〈脆弱な知性〉としての芥川の自殺。芥川のこうしたイメージは純文学作家の代表的な作家像の一つとなっている。

太宰治が芥川龍之介に憧れを抱いていたことはよく知られており、太宰治の自殺についても芥川からの影響が考えられる。芥川も太宰もその死は大きな反響を呼び、彼らの作家像は〈弱さ〉のイメージを纏っている。しかし、人生に痛み、傷つき、死を選んだ彼らの像は、現在においても我々読む人間の心を引きつけてやまない〈強さ〉ともなっているのだ。



芥川龍之介（https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/224.html?cat=27）
（旧制高校時代の太宰治はこのポーズで写真を撮っている）

不安と生の研究会